



汽車そして蜜柑

北区・上町支部 上町いまきいれ病院 | 丸山 芳一

年男・年女としての感想や希望などの原稿をいただきたく・・・と突然、手紙をいただきました。小生ごときところにまでご依頼が来たものだと思人選のご苦労がしのばれましたので、お引き受けいたしました。

今まで医報の新春随筆をしっかりと読んだことがなく、お手本もないのですが、おそらく寝転がってお読みいただく類と勝手に思い込んでおります。顔写真も添えるようにとのお達しでしたので気楽な1枚を選びました。新型コロナが下火になりました8月末、温泉での一枚です。備え付けの作務衣を着て笑っておりますのは前に小学1年の孫がいるからです。

さて、私は宮崎県西部の田舎生まれです。育った環境は自然の多い田舎で霧島連山を見ながら楽しくのんきに育ちました（版画は私の遊び場です。高千穂の峰を望み、手前を吉都線が通っていました）。父親が外科の開業医で医者になるに特段の期待感はなく、あんな人生かなと思ひながらなんとなく義務のような感じでした。外科になりたいとも格段思ったことはありません。父も専攻については何も言いませんでした。多分、基礎医学に進みたいといってもああ、そうかで終わったと思います。うるさい父親では全くありませんでした（これはこれで奇妙なプレッシャーではありますが）。同門の先輩にあたる兄も同じ感想と思います。

ところで年男としての「感想や希望」を記せとありますが、将来に展望・希望は時にございません。この年になりますとひたすら過去を振り返っております。なかでも版画にありますよう風景を見ておりますとなつかしい汽車の音とにおいが思い出されます。と申しますのも今秋、盛んに鉄道記

念のテレビ特番をやっており、画面の蒸気機関車を眺めておりましたら、石炭のにおいと



ともに小さい頃の田舎にタイムスリップしたような感じがしました。私が高校生の頃まではディーゼル機関車のほかに、時々蒸気機関車が走っておりました。やたら人間臭い車両で上塗りを重ねた塗料太りの金属部、すりへった木製の床、黒光りする手すり、垂直の固い座席。窓は広々と開き、車両デッキはドアもなくいつでも飛び降りることができました（飛び降りる勇気はありませんでしたが、ゆっくり動き始めた汽車に飛び乗ったことはあります）。便所はハイスピードで後ろに流れる線路が真下に見えました。そして何よりも石炭のにおいが記憶を呼び起こします。人は視覚ではなく嗅覚で記憶が呼び戻されるのだそうです。ここまで来て、突然、芥川龍之介の短編「蜜柑」が思い出され、本棚から探し当てて再読しました。芥川の理知的で教訓的で皮肉っぽく、少し精神を病んだような作品とは異なり、この小品には芥川の中では珍しくさわやかな読後感が残ります。芥川は大正5年12月から8年3月まで横須賀海軍機関学校の英語教師をしており、この短編はおそらくその当時のものと思われます。舞台は1幕物で汽車の中の数分の出来事です。少し紹介いたしますと、「ある曇った冬の日である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下ろして、ぼんやり発車の笛を待っていた」



で始まり、薄暗いプラットフォームには見送りの人影もなく、檻に入れられた子犬が一匹、時々悲しそうに吠えたてている。これは芥川自分をみじめで孤独な子犬に例えたものでしょう。どんよりとした空気につつまれ、「これらはその時の私の心もちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりとした影を落としていた」。その時、けたたましい日和下駄の音とともに、二等車の戸ががらりと開いて十三、四の小娘が一人あわただしく入ってきます。その娘は油気のない髪をひつつめの銀杏返しに結って、横なでの痕のあるひびだらけの両頬を赤くほてらせたいかにも田舎者らしい娘です。知性の塊のような「私」芥川の腹の底に険しい嫌悪の感情が沸き立ちます。膝に包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかり握られており、不潔な服装、二等と三等の区別もつかない愚鈍さに腹立たしさは増します。汽車が動きだして幾分か過ぎたところに、例の小娘が向かいの席に移り、しきりに窓を開けようとしています。汽車がトンネルになだれ込むと同時に煤を溶かしたどす黒い空気が濛々と車内へ入り込み「私」は激しくせき込み、娘はそれに頓着もせず窓から首を出してじっと汽車の進む方向を見やっています。やがて汽車はトンネルを抜け、ある貧しい町はずれの踏切に通ります。「その時その簾索とした踏切の柵の向こうに、私は頬の赤い三人の男の子が汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、なんとも意味の分からない喚声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつと伸ばして、勢いよく左右に振ったかと思うと、たちまち心を躍らすばかりの暖かな日の色に染まっている蜜柑がおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空

から降ってきた。私は思わず息をのんだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、おそらくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懷に藏していた幾果の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切まで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。暮色を帯びた町はずれの踏切、小鳥のように声を上げた少年たち、その上に乱舞する鮮やかな蜜柑は私に「ある得体の知れない朗らかな心持が沸き上がってくるのを意識」させた。

以上が大まかな内容であります。若い先生方には遠い昔の出来事でしょうが、私はこのような世界、このような子供がいたことを知っております。友人の家に行くと畳ではなくゴザが敷いてあったこと、昼の弁当をもってきておらず校庭で昼食時間を過ごす子もおりました。もちろん修学旅行には数名の欠席者がおりました。そして中学卒業と同時に集団就職の汽車の窓から手を振った友人も知っております。昨今、鉄道ブームで「撮り鉄」などと呼ばれる人もたくさんいますが、私には古い時代の汽車には暗い負のイメージしかありません。それは楽しい希望に満ちた旅立ちではなく、悲しい不安な別れだったはずです。このような悲壮で硬質で有無を言わせないような力強い蒸気機関車の中で「朗らかな心持」をもたらした数個の赤い蜜柑、粗野で無教養な小娘の行いは世知辛い今日を生きる小生にも「朗らかな心持」をもたらせてくれました。

